

特別講演 2

「認知症診療における骨粗鬆症治療の重要性

—寝たきり認知症を防ぐために—

大分大学総合内科・総合診療科

吉岩 あおい 先生

本邦の認知症は、現在 462 万人、予備群が 400 万人と報告され、最も頻度が高いアルツハイマー病は、ありふれた疾患(common disease)と捉えられるようになってきた。

一方、人口の高齢化に伴い、骨粗鬆症患者も急増しており、脳卒中、認知症とともに、大腿骨近位部骨折が寝たきりの原因の多くを占めている。両疾患の合併も多く、転倒による骨折のため寝たきりとなり、認知症を発症してしまう。

認知症患者が大腿骨近位部骨折を起こした場合、訴えがはっきりせず、骨折の発見が遅れ合併症を伴う、術後せん妄のためリハビリが遅れる、認知症の行動・心理症状(BPSD)があり、投薬やリハビリが困難などの理由から寝たきりになってしまうため、骨折を予防することが重要である。

寝たきり認知症を防ぎ、一日も長く自宅で生活を送るためには、認知症、骨粗鬆症ともに早期の適切治療と、地域の連携が必要である。